



PHOTO : エックスワン

S a t o s h i

F u j i m o t o

2008年9月6日から17日まで開催されたパラリンピック北京大会。オリンピックにも負けない様々なドラマが繰り広げられ、胸を熱くした方も多いと思いますが、皆さんの記憶にはどのように残っているのでしょうか？

今号そして次号にわたりパラリンピック北京大会で活躍した四国出身アスリートをご紹介します。

まずは柔道66キロ級藤本聡選手。パラリンピック過去3大会連続で金メダル、そして北京で銀メダル。「平成の三四郎」と呼ばれる野村忠宏選手もなしえなかった4大会連続メダル。これほどの選手が過去にいたのでしょうか？

消費者行政インタビュー特別版（第一弾）としてお話を伺いました。

聡

◎パラリンピックから1ヶ月あまりが経ち、藤本選手の現在の心境はどういうお気持ちでしょうか？

気持ちの整理は特についていない。2年後に中国で行われるアジア大会が近づいてきたらモチベーションが上がるだろうが、今は今後のことなど考えたくない。

何よりも今は柔道が楽しい。パラリンピックまではストイックに試合に勝つためだけにいろいろと考えていたので、とても疲れた。そういうのを考えなくていいのが楽。ただ単に楽しむ。投げて気持ち良かった、投げられて悔しかったと、そういうことが実感できている。



PHOTO：エックスワン

◎ここまで勝ち続けてきた、モチベーションを維持できた要因は？

柔道が好きであるというのが基本中の基本。好きでなくては長続きしない。それから自分をアピールできること。それに柔道を通していろんな人とのつながりができていくのがおもしろい。

周りの人が応援してくれる。そういう人たちの期待に応えて恩返しをしたいというものもある。涙流してくれる人もいるし、喜んでくれる人もいる。柔道をやっている価値はある。自分自身にしかできない、誰にもできないと思う。そういうことがモチベーションの維持につながっていると思う。

◎選手自身が柔道を気持ちよくやるための環境作り

特に北京までの2年間は子供のときからやってきた柔道の人脈をフル活用して協力してもらいながら練習をやってこれた。パラリンピックでは大変だった。選手の情報が間違っていたり、試合の順番が違っていたりと……。障害者柔道界は組織として成り立っていない部分があり、全てが個人任せになっている。これからは組織を変えていかななくては日本の障害者柔道は勝てないと思う。その意味で自分から一石を投じていきたいと思っている。

新聞記事にもあるが、国の考えが社会福祉やリハビリテーション、レクリエーションのレベルの域を越えていない。選手はスポーツという意識でやっている。支援体制が整っていない今、自分たちで変えていかななくてはいけない。

現状では監督が選手の意見を吸い上げているシステムではないので、これではいけないと思い、動いている。組織の全てをひっくり返すくらいの気持ちでやっている。とにかく自分たちが気持ちよく試合ができる環境作りが必要である。

テレビでご覧になったとしたら、オリンピックの選手とくらべて、パラリンピックでの決勝戦の直後の私の悔しがり方は普通ではないと思われたかもしれません。実際にメディアの人からもどうしてですかとよく聞かれました。私は仕事をしながら職場にも理解を求めてやってきたので、どうしても勝ちたかった。自分で環境を作ってきた中で敗戦だったからあのような悔しがり方になったと・・・。



選手が気持ちよく戦える環境をつくっていかなければならない。こういうことは選手が考えることではないが、それでも変えていかなくてはいけない。水泳の河合純一君は2000年のシドニーの終わりから組織作りの活動を選手の先頭に立ってしている。柔道部も遅ればせながら私が先頭に立って活動していきたい。

たとえば、選手会を立ち上げて、Skypeで会議をしたり。選手の状況をメディアにわかってもらいたいし、それを上の組織のJPCやアジアのパラリンピック委員会の方とかに上げていきたいというのが今考えている流れです。



◎次世代へのメッセージをお伺いしたいのですが・・・

何よりも楽しむこと。やるときにはメリハリをつけて集中してしっかりやる。中途半端ではいけない。一生懸命するから楽しい。一生懸命やることによって、ものの本質が見えてくる。一生懸命やるから楽しいし、その競技のそれぞれの楽しさがあると思うので、そういうのを見つけてほしい。

支えてくれている人への感謝を忘れないこと。子供なら親に支えてもらっているが、自分が学校に通って部活動ができている環境は当たり前ではない。勉強したくてもできない人もいる。日本が恵まれすぎてそれが当たり前とされている世の中、当たり前でないことをわかってほしい。私は海外をまわって必死で生活している現地の状況を肌で感じてきた。そういうことも含めて支えてくれている人へ感謝しなければいけない。

社会人になったら仕事をしながら柔道をしなくてははいけない。やりたいこともできない。それとくらべて学生はクラブ活動がある。練習時間、練習相手が揃っている。時間を無駄にするなど言いたい。私が失敗してきたことであり、同じ失敗をしてほしくないから。これは柔道に限らないことだけれど・・・。

現役でいられるうちが花、現役でいられることに喜びがある。現役でいられるということは目標があるということ。目標がなかったら人間は動けない。何のために練習しているかわからない。私の印象に残っている言葉でメジャーの松坂大輔が言っていた「目標がその日その日を支配する」はまさにそのとおりだと思う。目標を達成するためにどうするか、どうやっていくか考える。そうすることで生活にハリができる。目標をしっかり持っている人は生き生きしている。目標に向かってがんばっている人はどんなレベルの人であっても尊敬できる。そういうことからパワーをもらえる。



◎パラリンピック北京大会、そしてロンドンへ

たぶん4年後のロンドンを目指すと思うが、あとはいつ火がつくかの話である。ボロボロになるまで、怪我で引退するか、国内で自分自身よりも強い相手が出てくるまでやるつもりである。

私は今回、「死にはせんわ」と思うことで気持ちに余裕ができた。

自分自身も勝ちたかったけど、負けてもいい経験ができた。負けた人の気持ちもよくわかった。

藤本 聡 (ふじもと さとし)

1975 年生まれ 徳島県徳島市出身

徳島県立盲学校に勤務しながら柔道の世界トップ選手として 10 年以上活躍中。

主な成績

1996 年パラリンピックアトランタ大会 65kg 級優勝

2000 年パラリンピックシドニー大会 66kg 級優勝

2004 年パラリンピックアテネ大会 66kg 級優勝

2008 年パラリンピック北京大会 66kg 級準優勝

1998 年世界盲人スポーツ選手権マドリード大会

66kg 級優勝

2002 年 IBSA 柔道世界選手権 (イタリア)

66kg 級優勝

2003 年 IBSA 世界選手権大会 (カナダ) 66kg 級 3 位

